

2025（令和7）年度入学試験問題

国 語

- 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 試験時間は60分です。
- この問題の本文は全部で19ページ（問題一・二）です。
 ネットワーク情報学部では、問題一のみを採点の対象とします。
 問題二は、ネットワーク情報学部のみを受験する方は解答しなくても結構です。
 同一日に他の学部を受験する方はすべてを解答してください。
- 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 解答は、設問に従って、該当する解答欄にマークしてください。なお、すべてマーク解答問題です。解答にあたっては、必ず黒の鉛筆またはシャープペンシルを使用してください。
- 解答用紙に記入するときには、下記の点に注意してください。
 - 氏名・受験番号を所定欄に記入し、該当するマーク欄を正確にマークすること。
 （機械処理上、非常に重要なので誤記のないよう注意してください。）
 - 訂正する場合は、プラスチック消しゴムで完全に消してから改めて書き直すこと。
 - 指定した解答欄以外および枠外の空白部分には何も書かないこと。
 - 解答用紙は、折り曲げたり汚したりしないこと。
 - 解答用紙の解答欄をマークするときは、次の（例）のようにマーク解答欄の番号をぬりつぶすこと。

（例） ③と解答する場合

マ ー ク 解 答 欄									
1	2	3	4	5	6	7	8	9	0
①	②	●	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩

- 問題冊子の余白等は適宜利用してかまいません。
- 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

問題一（現代文）

全員が解答してください。

問題一 次の文章を読み、後の設問に答えなさい。

今年は、母^Wの家の小さな庭で、梅^Xの木になるたくさんの梅を収穫し、過日、その全てを梅酒に仕込み終わった。時間がかかりそうなのを、まさか自分がやることになるとは思わなかった。親はすでに八十半ばを超え、梅の収穫は難しい。もし梅酒が飲みたいのなら、誰かがこの仕事を受け継ぐ必要があった。

とはいえ、わたしはアルコールに弱く、梅酒の梅一個でまっかになる。梅酒など、どうしても飲みたいものではない。そもそも生家を出てから長く、庭の梅の木にも梅の実にも、思い入れなどはまるでなかった。

ところがある日、木の下に、ごろりと横たわる黄金のブツを発見。落ちた梅だ。一個拾うと、翌朝、また一個。増えていくにつれ、それらがまるで、梅自身^Aの「催促」と感じられた。そして見上げれば木の枝には、ここにもあそこにも、青梅が陽に、輝いている。脚立を用意し、一個をもぐと、こちらもまた、一個、また一個と、もぐ手が止まらない。わたしは強欲だ。

「あーやってくれる人が現れた、夢のようだわ」。母が言った。このひとは、実を摘まずに、習慣を途切れさせることを、罪と感じていたらしい。台所には、未だ飲みきっていない、去年の梅酒がわずかに残っていた。

梅は洗ったのち、よく乾かし、へたのところを抉^{えぐ}り取って始末をする。この部分から雑菌が入ってカビが生じるのを防ぐためだ。瓶はもちろん、熱湯消毒する。

仕込み終わった大瓶が、今、実家の台所に並んでいる。わずかに差し込む光を吸い取って、そこだけどんよりと鈍く光っている。簡単には滅びそうもない重量感だ。梅というより時間そのものが、いよいよ熟成の準備に入ったようだ。

瓶の底に敷き詰められているのは、いまだ形を残した氷砂糖だ。これから長い時間をかけ、形をほどこき、ゆらゆらと液体に溶け出していく。瓶全体は、どっしりとして微動だにしない。ところが中身の果実の方は、黄金色の液体に自らの充実を受け渡し、安心し切ってプカプカと浮いている。

こうして引^B力と浮力という、真逆の方向に向かう力が調和していた。

それにしても、わたしはいつたい誰のために今年の梅酒を作ったのだろうか。梅の収穫が、つい面白くなって、次々もぎとってしまったのは確かだけれど、そこから先は否応のない流れに乗っただけ。自分のためでないことははっきりしている。母のため、というのも少し違う。母もまた、自分だけでなく、誰かも飲むから梅酒を作っていた。だがこの家にはもう、かつてのように、おぜいの人々が入りするわけでもない。今年の梅酒は、年をまたいで、だいぶ先まで残り続けるような気がする。

さて、作業が終わっても、庭の土のうえには、一個、また一個と、収穫の際に見落とした残りの梅が落下してきた。石にぶつかったか、鳥にでもつつかれたか、皮が破れ、傷ついたものもある。天然の産毛が汚れをはらうのだろう、土の上に落ちても汚れた感じはしない。

梅が落ちる瞬間を、わたしは見ることがない。ぜひ見たいが、梅の木の前にと陣取っているわけにもいかず、奇跡的な偶然はそう簡単にはやってこない。

正確に言えば、わたしは落ちてくる梅を見たいのではなく、梅が枝から別れるところを見たい。どのように別れるのかを見たい。そして梅が、地面に落下する音を聴きたい。

落ちる雪の音なら、わたしも冬の公園で聴いたことがある。誰もいないのに、背後で、いきなりどさりと音がして、驚き振り返ると、枝が揺れていた。枝の上に積もった雪が落ちたのだった。厳密に言えば、この経験も、雪の落ちた瞬間を見たわけではなく、落ちた後を確認しただけだ。不思議なことに何かが生成する瞬間というのは、なかなか目撃することができなくて、せいぜい、その前後を確認できるだけだ。

梅の落ちる瞬間にも、わたしは立ちあつたことがない。梅の実には、産毛がびっしりと生えていて、それをベルベットの布地に例える人もいる。そんな柔らかな表皮を持った実は、落ちても土に衝撃を吸収され、木琴のような素朴な音があがるくらいだろう。

わたしは昔からそんなことが気になるたちで、落葉を見ても、葉っぱが枝から離れる瞬間を、拡大鏡で見てみたいと思う。

梅の実についても同じだ。枝がある決意をもって梅を離すのか、あるいは梅の意志、梅の成熟をもって、枝から自然に実が落ちるのか。主体はどちらにあるのか。そんなことが気になる。決意とか意志とか言っても、もちろん、植物界のそれは、人間の世界にあるような感情とは無縁で、植物が生きる上で「時が満ちた」という納得が、枝と葉、枝と実の両者にやって来るのだと思う。

落葉の仕組みが気になって調べてみると、光の不足などで枯れ始めた葉っぱには、枝と葉の間に、「離層」と呼ばれる細胞層が形成されることがわかった。落葉は、植物の老化現象だが、この離層が形成されることにより、枝と葉が切断されるのだそうだ。

果実の実が落ちることを落果というが、落果の場合も落葉と同様で、果柄（かへい）（木の幹から出て実を支える枝）と果台（かだい）（実の付け根）とのあいだに、離層が形成されるという。離層とは、スムーズな離別を促す装置なのだ。

落葉や落果という植物の部分的な死は、一つの生命体が成長し生き延びるために必要なもので、植物を見てみると、生命というものが、そのように常時、死を抱え込んでいることがわかる。

ところで、俵約家の母は、落ちている梅を見つけると、かならず拾ってきて、追加で入れろと言う。わたしは一応、受け取っても、実際は入れたり入れなかったりする。落ち梅のいくつかを瓶には入れず、台所の片隅に置き、眺めているうちに、梅の、枝から分かれてきた部分、つまり、へたの部分に目がとまった。

手でもいだ梅は、いわば強制力によって、枝からひきはがしたため、その部分の処理が必要である。竹串を使ってきれいに始末をするのだが、慣れないわたしは、最初、手こずった。

ところが、自然の重力によって落下した梅には、その必要がまったくない。へたが最初から取れているのだ。枝から別れてきたどんな痕跡も見当たらず、最初からそうして生まれてきたかのように、ごく自然に、自らを巻き込んでいる。へた取りに苦労したものだからなおのこと、余分なものを一切脱ぎ捨てた、美しいくぼみに惹きつけられた。

落下した梅だけで梅酒作りができれば、こんなに楽なことはないが、梅酒に最適なのは青梅である。人間世界に食べ物として提供される場合、落ちた実は二級品の扱いを受けている。

しかしその存在そのものに注目するならば、割れていようと汚れていようと、D。そこには「落ちた」という事実に対する、枝（本体）と梅（分離体）双方の納得が感じられる。合点がある。合意がある。無理がない。だから別れの痕跡もない。

木を離れ、一個の存在となり、そのまま放置されれば、落ちた場所で腐っていくだけだ。果物にとっては、そこが死に場所となる。

とても若い頃、わたしには、初めて将来を約束した人がいた。すっかりその気になって浮かっていたら、ある日、その相手が別の人と結婚するという噂が聞こえてきた。ええっ、どういうこと？ 約束が継続中だと思っていたわたしは非常に驚いた。わたしたちの認識はどこでずれたのか。親にも言えず、一人悩んだが、自分にも何か非があるような気がして、相手を責められなかった。

最後と思って電話をかけた。電話の向こうにいる人に、ひとこと、結婚するの？ と聞いた。その人は黙っていた。吸いこまれそうな闇だった。黙っているということの中に、何もかもがあった。自分がしたことの意味を、そのひとは十分わかっているようだった。

あの時、世界は崩壊した。

約束というものは、はかないものだ。何の保証もないそんな危ういものをかわし、わたしたちは平気な顔で断崖を生きている。

あの時、はつきりとした破棄の言葉があれば、別れの言葉があれば、わたしは前に進めただろう。長く、この衝撃を引きずったけれど、歳月は流れ、わたしはその後を生き、今も生きていて、この顛末も忘れた。けれど落下した梅について書くうち、なぜかあ**の**時の記憶が蘇^{よみがえ}ってきた。

もつとも今、わたしのどこを見ても、あの時の傷は見当たらないだろう。長い年月にさらされたせいだろうか。嵐は吹いたが、あれもまた、自然の摂理^{しつり}の中で起こった落果^{らくくわ}だったのだと今は思える。

時が満ち、全ての細胞が納得し、梅は落ちる。枝から地面へ。その数秒間を思ってみよう。

例えば詩の行も、次々と落下する梅のごときものであったら、改行は、限りなく自然な切断となるだろう。それ自体の重みで自然に言葉が切れ、次へ渡る。言葉の別れ、切断こそが、詩のリズムを作る。

例えばわたしも落下している途中の梅ののだと、想像してみるのも面白い。いつ、どこへ落ちるのかわからない。その時はいきなりくる。それを見ると、木になる梅の一個一個に、覚悟というものが見えてくる。

地面に落ちた時、誰にも聞こえないほどの柔らかな音が立ち、そこから先のことは、もう誰にもわからない。実っていた時より、少しだけ遠い空。その時が来たら、もはや誰にも拾われたくはない。落ちた場所で、一人静かに朽ち果てていくことにしよう。

(小池昌代「別離」による。ただし設問の都合上、一部改変した)

問一 傍線部W「母」を詠んだ短歌のうち、作品と作者の組み合わせが正しくないものを次の①～⑦の中から一つ選び、解答欄

1 にマークしなさい。

- ① 垂乳根の母が釣りたる青蚊帳をすがしといねつたるみたれども 長塚節
- ② クリスチナ・ロセチが頭巾かぶせまし秋のはじめの母の横顔 北原白秋
- ③ かにかくに論あげつらふともうぬらが母の言葉のひびく国に起き臥す 土屋文明
- ④ たはむれに母を背負ひて／そのあまり軽きに泣きて／三步あゆまず 石川啄木
- ⑤ 死に近き母に添寝のしんと遠田のかはづ天に聞ゆる 与謝野晶子
- ⑥ 金木犀 母こそとはの娼婦なるその脚まひるたらひに浸し 塚本邦雄
- ⑦ 大工町寺町米町仏町老母買ふ町あらずやつばめよ 寺山修司

問二 傍線部X「梅」を使った故事に「梅を望んで渴きを止む」があるが、その意味として正しいものを次の①～⑤の中から一つ

選び、解答欄 2 にマークしなさい。

- ① 美しい梅を眺めると、幸福な気持ちで心が安らぐ
- ② 干ばつを防ぐために梅をたくさん植え、土中の保水とする
- ③ 梅を次々と食べると、のどの渴きが収まる
- ④ 梅の実の味を想像して、のどの渴きをこらえる
- ⑤ 絵に描いた梅を見ていると、口中の唾が引っこむ

問三 傍線部Y「儉約」の対義語としてもっとも適当なものを次の①～⑤の中から一つ選び、解答欄 3 にマークしなさい。

- ① 奢侈
- ② 質実
- ③ 吝嗇
- ④ 始末
- ⑤ 節約

問四 傍線部Z「摂理」の類義語としてもっとも適当なものを次の①～⑤の中から一つ選び、解答欄 4 にマークしなさい。

- ① 規範
- ② 理法
- ③ 結果
- ④ 方便
- ⑤ 道理

問五 傍線部A「梅自身の「催促」と感じられた」とあるが、その理由としてもっとも適当なものを次の①～⑤の中から一つ選

び、解答欄 5 にマークしなさい。

- ① 梅酒のために梅の実をさがしていると、熟成して黄金に輝く梅の実が、その美しさで目を惹くように次々と地上に落ちてくるから
- ② 地上に落ちている梅の実は、皮が破れ、傷つくことを梅の実自身が恐れるかのように黄金に輝いて、存在を主張して拾い続けることを促すから
- ③ 梅の実を毎朝のように拾うという行為をしていると、熟した黄金の梅ばかりでなく木についているまだ青い実までも目についてきたから
- ④ 梅の実を毎朝のように拾い続けていると、成熟の黄金色や朝陽に輝く青色に感動し、次から次へと梅がほしいという欲望が強くなってきたから
- ⑤ 毎朝梅酒のために梅の実を拾っていると、母から娘へとつながる梅酒造りという行為を梅の意志によって促されているように感じられたから

問六 傍線部B「引力と浮力という、真逆の方向に向かう力が調和していた」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを次の①～⑤の中から一つ選び、解答欄

6 にマークしなさい。

- ① 大瓶に差し込む光によって酒はますます重みを増して映り、氷砂糖の溶け出してゆく揺らぎは梅の实のエキスを酒にしみ出させる効能がある
- ② よく乾いた梅の实は、黄金色の酒がたっぷり詰まった大瓶の中で軽やかに泳いでおり、両者の対比するその姿は見事な美しさである
- ③ 酒には酒の落下志向があり、梅の实には梅の实の浮上感覚があるため、そうした上下感覚のずれが梅酒の熟成をもたらしている
- ④ 氷砂糖が敷き詰められた大瓶は重々しく台所に鎮座し、梅の实は酒の中で軽やかに浮いているさまが、梅酒の熟成する様子を見事にあらわしている
- ⑤ 梅の实は長い時間をかけ酒の中に浮いて溶け出してゆくが、大瓶は時間の流れに抗してどっしりとその存在を台所に主張している

問七 傍線部C「そんなことが気になる」とあるが、その具体的な例として適当でないものを次の①～⑤の中から一つ選び、解答

欄 7 にマークしなさい。

- ① 梅の実が落ちる瞬間にどんな音がするのだろうか
- ② 冬の公園ではどのようにして落雪が起きているのだろうか
- ③ 梅が落ちるときに木琴のような響きがするのはなぜだろうか
- ④ 枝が梅の実を落とすのだろうか、実の方から枝を離れるのだろうか
- ⑤ 植物も生きる上で納得して実を落とすのだろうか

問八 空欄

D

にあてはまる文としてもっとも適当なものを次の①～⑤の中から一つ選び、解答欄 8 にマークしなさい。

- ① 落ちた梅は見事な完成形だ
- ② ペルベットのような手触りの落果が欲しい
- ③ 青梅が落果に勝る
- ④ 梅酒には黄金に輝く落ちた梅が必要だ
- ⑤ 手でもいだ青梅こそ完璧である

問九 傍線部E「落下した梅について書くうち、なぜかあの時の記憶が蘇ってきた」とあるが、その内容としてもっとも適当なものを次の①～⑤の中から一つ選び、解答欄 9 にマークしなさい。

① 自然の重力によって落下した梅の実が必ずしもいい梅酒にならないように、結婚するつもり恋人とは自然な別れが難しかったと悟った

② 梅の実と梅の枝の納得した別れ方について考えていたら、昔の恋人との別れ方に離層にあたるものがなかったことに気づいた

③ 若いころに夢中になって梅の実をもちで梅酒づくりをした記憶が、別れた恋人との楽しかった日々の記憶と重なって思い出された

④ 梅酒を作るために梅の実を拾い熟成を待つ期間は、別れた恋人の思い出を癒す時の経過が必要だったと思ひ起こさせた

⑤ 心を痛めることなく恋人と別れるには、梅の実が枝を離れるときに吹き荒れる嵐が必要だったと思ひ至った

問一〇 この文章には「別離」という題がつけられているが、筆者の「別離」に関する考え方としてもっとも適当なものを次の①

⑤の中から一つ選び、解答欄 10 にマークしなさい。

① 梅の実が満ちれば自然と枝と別れ、地に落ち、やがて朽ち果てる。人間もそのように自然と朽ち果ててゆくことを望む。恋人との別離によって、結婚が果たされぬ永遠の約束として胸に刻まれ、やがて忘却の彼方に沈み、もはや強欲な自分が消え去ってしまう境地にたどり着きたいと願うからである。

② 母は毎年のように梅酒づくりには精を出し多くの人を歓待したが、その客人たちはもう来ない。梅酒は時とともに熟成するが、母の姿を見ることがもうない。梅の実と梅の枝との別れは、母と娘の別離の情景を思い出させる。母の思い出を胸に、豊潤な梅酒の黄金色の輝きを見つめていたい。

③ 母の小さな家での梅酒づくりは人生の儚さをしみじみと伝える。黄金の梅は次々と落ちてくるが、それは梅酒づくりには不可欠な梅の姿だ。私も恋人とのつらい別れを経験したが、それは梅の実と枝の別れを見つめることにより忘れていった。忘却は別離による心の痛みを軽くしてくれたのである。

④ 皮が破れ傷があっても自然に落下した梅は黄金に輝く美しさをもつが、残念ながら梅酒には適さない。輝かしく見える恋人の姿も、約束を果たさぬという裏切り行為によって結婚の相手としては不適格だった。美しさゆえに別離が訪れるという関係性こそ、すべての生あるものの宿命である。

⑤ 梅の実がいつかは時が満ち枝から離れる時が来るという覚悟を持っている。梅酒にされるために無理に青いうちにもがれてしまうこともあるが、本来は納得して落果となり朽ち果てていくことが望ましい。自分も過去のつらい別れを乗り越えた今、いつかこの世とも別れ、静かな生の終焉を待つ気になっている。

問題二（古文）

ネットワーク情報学部では採点の対象となりません。

ネットワーク情報学部のみを受験する方は解答しなくても結構です。

ネットワーク情報学部以外の学部を受験する方、およびネットワーク情報学部と他学部を併願している方は解答してください。

問題二 次の文章を読み、後の設問に答えなさい。

かくて二三日、音もせさせ給はず。^(注1) たのもしげにのたまはせしことも、いかになりぬるにかと思ひつづくるに、いも寝られず。目もさまして寝たるに、夜やうやうふけぬらんかしと思ふに、門をうちたたたく。あなおほえな^(a)と思へど、問はすれば、宮の御文なりけり。思ひかけぬほどなるを、心やゆきてとあはれにおぼえて、妻戸おしあけて見れば、

見るや君さ夜うちふけて山のはにくまなくすめる秋の夜の月^(b)

うちながめられて、常よりもあはれ^(c)におほゆ。門もあけねば、御使ひ、待ち遠にや思ふらんとて、御返し、

ふけぬらんと思ふものから寝られねどなかなかなれば月^(b)はしも見ず

とあるを、おしたがへたる心地して、「なほくちをしくはあらずかし。いかで近くて、かかるはかなし^(c)ごとも言はせて聞かん」と思したつ。

二日ばかりありて、女車のさまにて、やをらおはしましぬ。^(d) 昼などはまだ御覽ぜねば、はづかしけれど、さまあしうはちかくるべきにもあらず。また、のたまふさまにもあらば、はぢ聞こえさせてやはあらんずるとて、ゐざり出でぬ。日ごろのおほつかなさなど語らはせ給ひて、しばしうちふさせ給ひて、「この聞こえさせしさまに、はやおぼしたて。かかるありきの、つねにうひうひ^(f)しうおほゆるに、さりとて参らぬはおぼつかなければ、はかなき世の中に苦し」とのたまはすれば、「ともかくも、のたまはせんままにと思ひ給ふるに、^(d)見ても嘆くといふことにこそ思ひ給へわづらひぬれ」と聞こゆれば、「よし見給へ。^(注2) 塩^(注3)焼き衣にてぞあらん」とのたまはせて、出でさせ給ひぬ。前近き透垣^(e)のもとに、をかしげなる檀^(まゆみ)の紅葉^(e)の、少し紅葉^(もみ)ぢたるを折らせ給ひて、高欄におしからせ給ひて、

^(g) ことの深くなりけるかな

とのたまはすれば、

^(h) 白露のはかなくおくと見しほどに

と聞こえさするさま、なさけなからずをかしとおぼす。宮の御さま、いとめでたし。御直衣に、えならぬ御衣、いだし桂にし給へる、あらまほしう見ゆ。目さへあだあだしきにやとまでおぼゆ。

〔和泉式部日記〕による

(注1) たのもしげにのたまはせしこと……これ以前に、宮は女に、みずからの屋敷に迎えるつもりがあることを話していた

(注2) 見ても嘆くといふこと……慣れすぎると、相手に飽きられてしまうのではないかということ

(注3) 塩焼き衣……慣れてこそ関係は深まるのだということ

問一 傍線部A「心やゆきてとあはれにおぼえて」は、「夜な夜なは目のみさめつつ思ひやる心やゆきておどろかすらん」という和歌の一部を引用した表現だが、そのことを踏まえたうえで、傍線部Aの解釈としてもっとも適当なものを次の①～④の中から一つ選び、解答欄 11 にマークしなさい。

- ① 宮のことをずっと気にかけていた私の心が相手に通じて、来訪をうながしたのかと思われる
- ② 宮に対して手紙の一つも返さずにいた私の頑固さに、宮はびっくりしたのだろうかと思われる
- ③ 相手のことを思っただけで寝ることもできないのは、私だけではなく、宮も同じだったのかと思われる
- ④ 相手への思いの深さを心ゆくまで語り合いたいと思っているのは、私だけではなく、宮も同じだったと思われる

問二 二重傍線部(a)～(e)についての文法的説明の組み合わせとしてもつとも適当なものを次の①～④の中から一つ選び、解答欄

12 にマークしなさい。

- | | | | | | |
|---|------------|------------|-------------|----------------|------------|
| ① | (a) 形容詞の一部 | (b) 完了の助動詞 | (c) 形容動詞の一部 | (d) 謙譲の補助動詞の一部 | (e) 同格の格助詞 |
| ② | (a) 形容詞の一部 | (b) 完了の助動詞 | (c) 副詞の一部 | (d) 謙譲の補助動詞の一部 | (e) 主格の格助詞 |
| ③ | (a) 終助詞 | (b) 自発の助動詞 | (c) 形容動詞の一部 | (d) 尊敬の補助動詞の一部 | (e) 主格の格助詞 |
| ④ | (a) 終助詞 | (b) 自発の助動詞 | (c) 副詞の一部 | (d) 尊敬の補助動詞の一部 | (e) 同格の格助詞 |

問三 傍線部B「なかなかかなれば月はしも見ず」の解釈としてもつとも適当なものを次の①～④の中から一つ選び、解答欄

13 にマークしなさい。

- ① 月の片端だけ見てもかえって心乱れるだけだから、月を眺めるのはやめにした
- ② 月を見たらいいよ寝られなくなるだろうと思ったから、月を見てはいない
- ③ 宮は、私にとって月のように手が届かない存在なので、そのことを嘆いていた
- ④ 宮のことを思っつてゆっくり眠ることができない私を、月は気にかけてもくれない

問四 傍線部C「いかで近くて、かかるはかなしごとくも言はせて聞かん」の心情の説明としてもっとも適当なものを次の①～④の

中から一つ選び、解答欄 14 にマークしなさい。

- ① 近くにいなながら、なぜ時々和歌のやり取りをする程度のはかない関係になってしまったのかという女の無念
- ② 近くにいたら、こちらの気持ちを踏みにじるようなつまらないことは決して言わせないのという宮の憤慨
- ③ 一緒に住むことで、こうした和歌をもっと親しく、直接に交わすことができるようにしたいという宮の願望
- ④ 何をどうしたら、もっと二人の距離を縮め、無常の世の中で心慰め合うことができるだろうという女の苦悩

問五 傍線部D「やをらおはしましぬ」の現代語訳としてもっとも適当なものを次の①～④の中から一つ選び、解答欄

15 に

マークしなさい。

- ① 堂々とおいでになれなかった
- ② 急にいらつしやった
- ③ あわただしくおいでになった
- ④ 人目につかないようにいらつしやった

問六 傍線部E「はぢ聞こえさせてやはあらんずる」を単語に分けた場合、もっとも適当なものを次の①～⑤の中から一つ選び、

解答欄 16 にマークしなさい。

- ① はぢ／聞こえ／させ／て／や／は／あらん／ずる
- ② はぢ／聞こえさせ／てや／は／あら／ん／ずる
- ③ はぢ／聞こえさせ／て／や／は／あら／んずる
- ④ はぢ／聞こえ／させ／て／やは／あらん／ずる
- ⑤ はぢ／聞こえさせ／てや／は／あら／んずる

問七 傍線部F「かかるありきの、つねにうひうひしうおぼゆるに、さりとて参らぬはおぼつかなければ」の説明としてもっとも

適当なものを次の①～④の中から一つ選び、解答欄 17 にマークしなさい。

- ① あなたのもとに来るのは、つねに気恥ずかしい思いがするが、かといってやって来ないとあなたのが気にかかって仕方がない、という宮の言葉
- ② あなたが私のところに来てくれれば新鮮な思いがするはずだが、しかしそれまでの間、いつもこうして私が参上するのは人目が気になる、という宮の言葉
- ③ 一緒にどこかに出歩くと、つねに新しい宮の一面を知ることができるので、誰かに見られたらどうしようとは思うものの、一緒にいたくてたまらない、という女の言葉
- ④ 一緒にすごしていると、いつも宮と初めて出会った頃のことか思い出されるから、もっと私のところに来てほしい、訪れが待ち遠しい、という女の言葉

問八 傍線部G、Hは合わせて一つの和歌になるように工夫されているが、その和歌の意味としてもっとも適当なものを次の①～

④の中から一つ選び、解答欄 18 にマークしなさい。

- ① 露は朝日を浴びて消えるほかないものだが、私たち二人の愛はそうにはかないものは、つゆほども思えないことよ
- ② 檀の葉は、おなじ「ま」の音で、男女のまごころをあらわすから、深い心の通い合いが実感できて縁起がよいなあ
- ③ 露がおりに檀の葉の色が濃くなるように、二人の間に交わされた和歌も情愛のこまやかなものとなったなあ
- ④ はかない露によって色が深くなった紅葉を見るにつけ、世ははかないものとの思いも深まってきたことであるよ